SUN太お楽しみ会には多くの方にお越しいただきありがとうございました。例年とは異なる開催で保護者の皆様には多大なるご迷惑をおかけしましたが、おかげさまで温かい雰囲気の中、子どもたちのステキな姿を見ることが出来ました。ご協力いただきありがとうございました。

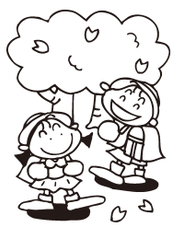
寒い日が続いていますが、子どもたちはかけっこをしたり砂場でままごと遊びに夢中になったりと、元気に外遊びを楽しんでいます。園では感染予防として、手洗い・うがいを引き続き励行し、元気に過ごしていきたいと思います。

保育園生活も残りわずかとなった「らいおん組」…卒園までの時間を大切に、楽しく過ごしていきたいと思います。また、在園児のお子様たちも進級を控え各年齢に応じて、それぞれ無理のないよう移行の準備を進めていきたいと思いますので、ご協力の程よろしくお願いいたします。

節分

「ツノはどうしようかな！」「髪の毛はどうしようかな？」子どもたちのアイデアがたっぷり！とってもすてきな鬼のお面ができあがりました。飾ってみると、お部屋はまるで鬼ヶ島！　どことなく子どもたちに似たお面からは、一人ひとりの個性があふれだしています。「鬼は外！福は内！」節分の日には、元気なかけ声が響き渡ることでしょう。豆まきで、自分の中のちょっと苦手な鬼を退治し、多くの福を呼びいれるといいですね。

保育所児童保育要録の送付を実施します



小学校などに就学する保育園児童に対する「保育所児童保育要録」の作成が義務付けられ、小学校などへ送付することになりました。これは、2009年４月から施行された「保育所保育指針」に基づき、子どもの育ちを支える資料として保育園が作成するものです。対象は、今年４月に小学校などへ就学する保育園児童全員で保育園から就学先の小学校などにお渡しする予定です。

SUN太お楽しみ会アンケートへのご協力をお願い致します

★2021年度の実施日は2022年1月22日（土）となります★

2月の予定

2（火）　調理保育（ぱんだ）
3（水）　節分の日会
4（木）　音楽指導（幼児）
5（金）　調理保育（らいおん）
8～12　身体測定
9（火）　たまっ子座公演
10（水）　職員会議
10（水）　調理保育（くま）
12（金）　お誕生日会
15（月）　体育指導（幼児）
15（月）　職員園内研修
18（木）　ひな人形飾り
19（金）　お別れ遠足（らいおん）
26（金）　お別れ遠足（雨天）
27（土）　新入園児面談

※２月度避難訓練は実践訓練のため、抜き打ちでの実施となります。

３月の予定

3（水）　ひなまつり（誕生）
6（土）　新入園児面談
8～12　身体測定
9（火）　体育指導（幼児）
12（金）　職員会議
27（土）　卒園式（らいおん）
29（月）　新クラス開始

新クラス説明会は中止とさせていただきます

年間予定にて2月～3月に実施を予定していた新クラス説明会は、感染拡大防止のため中止とさせていただきます。説明会にてお伝えする予定だった内容につきましては、文書などにてお伝えさせていただきます。

※新入園児の方を対象とした「新入園児健診」「新入園児個別面談」は予定通り実施します。

育ち合う子どもたち

「子どもへのまなざし」（福音館 1998）佐々木 正美 著

子どもというのは、自分の子どもだけが育つということはありえなくて、人と、とくにほかの子どもと育ち合うのです。親は、自分の子どもといっしょに育ち合ってくれる子どもたちが、視野に入っていなくてはいけないのです。ですから、自分の子どもはよその人に育てていただこう、ご近所の人たちに育てていただこう、親戚の人たちに育ててもらおう。そのかわり自分も、よその子どもをいっしょに育てようという、こういう気持ちを、いつももっていることがたいせつです。みんながこういう気持ちを失ったら、子どもはまず、社会人としての人間に育っていかないと思うのです。

子どもというのは、育つというよりは育ち合う存在ですから、この「育ち合う」ということを、子どもを育てている人たちは、よく考えるべきです。自分の子どもが育っているということは、自分の子どもといっしょに、育ち合ってくれる子どもがたくさんいるということなのです。

ある保育園で保母さんから聞いたお話ですが、ご紹介します。

子どもたちは年長組にもなりますと、仲間同士で上手に遊んでいます。一歳のときからいっしょに育ってきた男の子で、四人の仲間がいるのですが、みんな虫が好きで園庭にでるたびに、「むし、むし」といっては走りまわっているのだそうです。四人は毎日のように図鑑をみているので、虫の名前はもちろん、どんな場所にすんでいるか、なにを食べるか、なんの仲間かなど、よく知っているのだそうです。もうりっぱな虫博士ですね。

遊びはいつも、四人連れ立っての虫さがし。そんなに広くない保育園の庭で、さまざまな虫をつかまえ、カミキリムシとかナナフシまでみつけだしてきては、「えっ、こんな虫がいるの？」と保母さんたちをびっくりさせているのだそうです。こんな子どもたちですから、園のお楽しみ会のための劇の練習なんて、まったく興味ありません。ちょっと目をはなすと、すぐに園庭へでていってしまいます。もう、劇の練習もあったものではありません。そこで、保母さんたちは考えたそうです。むりやり練習させようとしてもだめなことは、日常の生活をみていてわかっているのですね。

困って考えだしたのが、劇の登場人物を、子どもたちの好きな虫にしようというアイディアです。そこで子どもたちに、「いちばん好きな虫はなあに？」と聞いたそうです。子どもたちは、「ヤンバルテナガコガネ」、こういったのです。そこで、「四人でヤンバルテナガコガネの役をやらない？」とさそうと、顔を見合わせていましたが、「うん、やる」。そして四人とも練習に参加して、劇を成功させたというのです。

虫博士の四人の影響で、クラスのみんなも、虫に無関心ではいられなくなって、散歩中にちょっとめずらしい虫をみつけると、みんな大さわぎ。四人に虫の名前を聞いたり、どうやって飼えばいいのかとか…。また、そのクラスには障害をもった子がいたのですが、その子は四人のうちのひとりが大好きで、いつもうしろをついて歩いていって、いっしょに虫をつかまえて遊んでいるそうです。

このような保育園でのお話を聞くたびに、私は、子どもは子ども同士で、ちゃんと遊び合い、育ち合っていくのだと思うのです。たいせつなことは、仲間といっしょになって熱中できるテーマ、遊びをみつけられるように、うまくみちびいてあげることなのです。ほうっておいても、なにかをみつけて、自分から参加できる子どもなら、それでいいのですが。

ところが、親が「子ども同士で育ち合う」ということを知りませんと、自分の子どもだけを一生懸命に教育しようとします。たいせつな勉強を学校の先生から、水泳やサッカーをスポーツクラブのコーチから、ピアノやヴァイオリンのレッスンを音楽の先生から、英会話を外人講師から、というように大人からいろんなことを教えてもらっていれば、大丈夫と思ってしまいます。そして、家庭では親がきちんとしつけをしてさえいれば、申し分のない子どもに育つと、思いちがいをしている親がいないでしょうか。

確かに、知識はふえるかもしれません、スポーツやピアノの技術はのびるかもしれません。ところが、子どもの人格の中心の部分は、そんなことだけでは育たないのです。知識や技術は、それだけでは人格と無関係だということも、ひょっとすると、多くの親は知らないのかもしれませんね。知識が豊富だと、それだけで人格者になると思っているのかもしれません。

私たちはともすると、子どもが勉強ができたり、ピアノとかスポーツの能力がすぐれていると、「人間ができた」と思ってしまうのです。ところが、そんなことはまったくないのです。コマまわしがうまいとか、メンコが上手だということが、それだけでは人格と関係ないのとおなじように、算数ができたって国語ができたって、それで人格ができたということではないのですね。

子ども自身が、自分の年齢相応の社会性を身につけていかなければ、その子どもたちは、子どもたちの社会にはなじめないのです。今日、児童精神衛生のクリニックは、社会性の不足した子どもたちでたいへんな混雑です。ある子どもたちは、いろんな身体的な変調をうったえる心身症の状態で、またある子どもたちは不登校、かん黙、家庭内暴力、拒食、非行などの非社会的、あるいは反社会的な行動がでてきて、親に連れられてやってくるのです。

彼らの多くに共通していることは、なにごとも大人からしか、学んでいないということです。子どもは、子どもから学ばなければならないのです。子ども同士でおたがいに教え合わなければ、子どもは子ども社会に適応するための、社会的人格を身につけることができないということです。

ですから、たとえば不登校の子どもは、仲間や上級生から、なにかを学ぶ態度や習慣が身についていないともいえます。仲間からなにかを教えられたり、仲間に教えたりする習慣や感性がないのです。このような能力は、小学生になって急に身につくものではけっしてありません。幼児期からの友達との遊びをとおして、発達的に獲得されていくもので、大人には教えてあげることのできないものだと思います。その後、学校をふくめた社会のなかで生きていく子どもたちは、人間関係のなかで生きる習慣を、身につけていかなければなりません。そのためには、子ども同士で育ち合うという経験は、とてもたいせつなことなのです。

子どもは、本当にいろんな人との関係のなかで育ち、仲間との交流をとおして、たがいに育ち合うのです。ですから、子どもを育てるということは、まず親自身が、どういう人たちと、どのようにコミュニケーションをしながら、地域社会で日々生きているのかということを、子どもにお手本を示すことが必要でしょう。それは、人それぞれには相性があるでしょうから、だれとだって親しくするというわけにはいかないかもしれません。けれども、それぞれの地域社会に何軒かは、家族ぐるみでつきあえるような家族をみつけるということ、それが育児をするための基本的要件だというぐらいの気持ちは、もったほうがいいのではないでしょうか。